

郎も堅く允子を抱き締める。油ゼミの鳴きしきる中、「緑の草の上には、ちいさい白い、とんがったものが、水晶のように光っていた。」という描写で、この場面は終わる。

二、三日後に允子は、歯の抜けた口の中に指を入れたまま昌二郎のところへ遊びに行く。庭のビワの木にうまく登れない、しかし負けん気の允子も手を引いてもらってやっと登ることができる。これに続く場面は下のとおりである。

大きなビワの木の、中ほどの左の枝に、昌二郎がまたがり、右の枝に允子が腰をかけていた。ふたりは、一本の木の両がわにならんで、熟した実をえり取っては、うまさうにたべていた。その横のスギの木から、ビワのほうに、にゅっと突き出した枝の先には、これも仲よくカタツブリが二匹、つのも動かさずに、ちよこなんとのつかっていた。家の者は野らに行つたと見えて、あたりには人の声もしなかった。

ただ、ふたりがたべては落とすビワの種が、土の上ではね返る音だけが、ま昼の静けさを破っていた。

日は照り、野は輝き、風は軽かった。

道ばたの横の小川のはしで、ガチョウが三、四わ、ガアガア何か立ち話をしていた。

水の上を縫って、ヨシキリが一わ、すうっと飛んだ。

この後、木の上で遊んでいる允子の背中を突つたものがあり、それが昌二郎の胸のポケットに隠し持っていた例の糸切り歯であったことが描かれる。「糸切歯にて糸を切るその音につくなわれ来しおんなと思う」（山本篤子）の一首からも推知されるように、「糸きり歯」の章は、『女の一生』の世界を占うものであることを、ここでおさえておいてよいであろう。

こうして始まった長篇小説について、折から留学を終えて帰国した高橋健二が作者を訪ね、「メルヒェンふうの序章にさわやかな感銘」を受けたことを、「書き出しはなかなかいいですね」と言うのと、前掲のごとく、悪く言うやつがいたらお目にかかりたいと応じて笑ったという。高橋はこの間の事情を、「長いあいだあなたのために取っておきの話で、作者として自信を持っていたのであろう」と推測している。ここに「取っておきの話

とあるのは、題材的には有三自身の体験に負うところが大きかったからにほかなるまい。それが、創作に際し、自己と題材と作品との間で無理のない、おのずからの表現となる、自らのいわゆる「芸術はあらはれなり」の理想にかなうケースでもあった一事を思ったであろう。それには有三の女婿永野賢の伝える事実も関係したに違いない。永野によると、作者の母の実家の従姉が山本家に行儀見習いに来ていたことがあり、有三の二つ歳下の鈴木タキも、高等小学校を卒業するとすぐ来たという。そして、幼少から「利発で勝気」であったタキが、有三と庭の柿の木に登って遊んだことがあり、彼女には御木允子に通ずるものが認められると述べている。しかも、タキの方が有三に好意をずっと抱いており、また有三の方でも思いは深いものがあつたらしい。『女の一生』の昌二郎に対する允子の思いは、有三に対するタキのそれと響き合うところがあつたのであろう。その萌芽のようなものは、「糸きり歯」にも見いだすことができる。

作品では、山本家の柿の木をビワの木に変えて書いたものようである。小説の世界として考えると、この場合、季節感や二人が食べること等の諸条件から、さわやかさとあいまって、ビワの実の方がふさわしいようにも思われ、また油ゼミも歯の疼ぎと相応じて表現効果がある。抜歯の事実の有無はわからないけれども、本登りのことが実際であつてみれば、それに近いことが二人の間にはあつたのかもしれない。それらが「糸きり歯」の中に結晶し、高橋健二への言葉になったのではなからうか。それにはまた執筆上他の契機も考えられてよく、作品の獨創性にこれがあつたのではないかと推定してみたい。

二 ケラー作「村のロメオとユリア」の鷗外評

『緑のハインリヒ』(一八五四、改稿一八七九)で知られるゴットフリート・ケラー Gotfried Keller (一八一九〇)に短篇集『ゼルトヴィーラの人々』『Die Leute von Seldwyla I』(一八五六)があり、名作の誉れ高い「村のロメオとユリア」『Romeo und Julia auf dem Dorfe』(一八五六)が収められている。そのタイトルからも推測されるように、シェークスピア

アの悲劇で、有三も関心を持っていた『ロメオとジュリエット』*Romeo and Juliet* (一五九四―九五)のモチーフに拠った作品である。ケラーのこの小説は、土地の境界問題で対立し抗争する家同士の関係をよそに、若い男女の遊びたわむれる、ほほえましい一齣を含んでおり、それが次のように描写されている。男の子は七つ、女の子は五つである。

女の子はくたびれてゐたので、緑の草が一面にはえてゐる場所に仰向けになつて、単調な節まはして、短い歌をうたひはじめたが、それはいつまでたつても同じ文句のくりかへしだつた。(中略)太陽は歌をうたつてゐる女の子の開いた口のなかにさしこんで、眩しいほど白い歯を照らし、ふつくらした真赤な唇がちらちら光つてゐた。男の子はその歯に目をつけると、女の子の頭を手で支へて、珍しさうにその歯をしらべながら叫んだ、「あててみな、歯つて、いくつあるか。」女の子は丹念にかぞへてもあるやうに、ちよつと考へて、それからあてずっぽうに言つた、「百よ。」「ううん、三十二だい」と男の子は言つた。「おまち、おれが勘定してみるから。」彼は女の子の歯をかぞへた、がどうしても三十二にならないので、幾度も幾度も初めから勘定のしなほしをした。女の子は長い間じつとしてゐたが、熱心な計算係がいつまでたつてもかぞへ終らないので、はねおきて叫んだ、「こんだはあたいが勘定してあげる。」そこで今度は男の子が草のなかに横になつた、女の子はその上にのしかかつて、頭をかかへた、男の子が口をあけた、女の子はかぞへた、ひとつ、ふたつ、ななつ、いつつ、ふたつ、ひとつ。小さい別嬪さんはまだ数の勘定ができなかつたのである。男の子はそのましがひを直して、数のかぞへ方を教へてやり、女の子は何遍でも初めつからかぞへなほした。この遊びは、ふたりが今日やつたいろんな遊びのうちでも、一番気に入つたらしかつた。だがしまひに女の子は小さな算術の先生のうへにすつかりしなだれかかつてしまひ、ふたりとも明るい昼の日光に照らされながら眠りこんでしまつた。(伊藤武雄訳「村のロメオとジュリエット」)

明るい日の光の下、緑の草の中で互いに口の中をのぞいて歯を数え合う様子、その恰好を思うとき、「糸きり歯」を想起させる。大学でゲルハル

ト・ハウプトマンを書いて独文科を卒業し、その後シュニッツラーやストリンドベルクの作品を翻訳し、またゲーテを好んだ有三であったから、イスのゲーテと称されたケラーを繙く機会がなかったとは言えない。「村のロメオとユリア」は、大正七年(一九一八)に草間平作、十年に牧山正彦、十三年には高坂義之によって翻訳が出され、その後改版も出、他作品も高坂はじめ江間道助・新関良三らの手で訳されるなど文芸界もこの作家を紹介する時期に入つたのである。有三が草間や牧山・高坂の訳を読んだ可能性もあり、また、西洋文芸の翻訳者・紹介者としての森鷗外に心を寄せていたことにも注意を払う必要がある。有三のシュニッツラーへの親炙のきっかけを作つたのは鷗外であつたが、『女の一生』欄筆二年後の昭和十年夏における座談会に關係の発言が見える。鷗外熱上昇のことを口にした佐佐木茂索に、正宗白鳥が、鷗外の晩年の前までは翻訳や紹介ばかりであつたと言つと、有三は、「僕は此翻訳や紹介の影響は非常にありと思ひますねえ。」と応じている。そこに自らの場合を重ね合わせていたのであろう。実際鷗外を多く読み、その翻訳で作劇法を学んだようである。

その鷗外に「情死」(『明星』明治三六・一〇)の一文があり、「村のロメオとユリア」を挙げて、これを西洋で心中を描いた作品の一つと紹介し、「地界を争へる二家の少年男女、身を舵なき小舟に託して流を下り、暁に近づきて相抱いて水に投せり。」と、簡にして要を得た梗概を記している。

これ以前の執筆にかかる「鷗外文話」(『しがらみ草紙』明治二六・三)中、男女の情交を文芸的に写すには「感情的」と「観相的」と、「諷刺」と「評発」との書き方があると述べた条で、これらとは異なるもう一つの表現様式についての説明が、

慇懃を主とすると、高致を主とするとの別あり。彼は易くして此は難し。シエクスピヤが伊太利の相讎したる二家の児が相慕ふ状を写し、伝奇は、高致極まれり。ケルレルが村中のロメオ及びユリアは此案を一翻し、慇懃を以て之を出したり。禾雲二児を埋めて、皓齒日に映し、仰臥し告天子の飛翔を觀つ、相譚する一段は、妙構妬むに足れり。

と見える。右の「高致」に対する「慇懃」は、「なまめかしくおろかなさ

ま。嬌癡の態。」を意味するというが、「嬌癡」に当たってみると「からだつきはおとなびてゐるが、まだ情事を解せぬ。又、其の人。おほこ。嬌癡。」とある。これはケラー作中の若い男女ザリーとヴレンヘンとにおける交情の天真爛漫な様子の描写例にかかわる。この批評文の背景には、掌上に舞うかのような往昔の美女飛燕に当代の「憨態」の女子宝児を対比した唐の顔師古の『隋遺録』や明清文芸の叙述もなければならぬ。「掌上の舞」は鷗外も用いた表現であり、従って「憨態」も掌中の語であった。

上掲「鷗外文話」は、つとに『国民之友』の明治二十二年（一八八九）九月第六十二号に、「情詩ノ限界ヲ論ジテ猥褻ノ定義ニ及ブ」の題で公にしたものであり、その際印刷の不手際のため次号に再掲した評論であった。これは『かげくさ』（春陽堂、明治三〇・五）に「猥褻」のタイトルで収められたが、この単行本は明治四十四年五月訂正再版が出された。後の菊判『鷗外全集』（鷗外全集刊行会）の第二巻（大正一三・一〇）に収録されたこともちろんである。この全集は再版も出され、昭和四年には普及版も上梓された。『スバル』掲載で当時全集未収録の「椋鳥通信」（明治四二・三―大正二・一二）にケラーについての注目すべきほどの記事はないけれども、こうした出版状況から推して、如上の文章は、作品とともに有三人目に触れて創作への刺激となったのではなからうか。

しかし、『女の一生』と「村のロメオとユリア」との結び付きについての有三人自身の言及は見えず、ケラーの名についても挙げたことのない一事からすると、「糸きり歯」とこのスイスの作家とは無関係であって、作中の類似も偶然的の暗合であるかもしれない。その場合を想定すれば、二作間に影響関係はなかったことになるが、解釈・鑑賞の際、対比的視点から参考になるところがあると思われるのである。

三 「糸きり歯」と「村のロメオとユリア」

『女の一生』と「村のロメオとユリア」とは、その内容は大きく異なる。一方は都会で波乱の中を向目的に生きる一女性の半生を描き、主人公が新たな人生への入口に立つ時点で擱筆した形になっている長篇であり、他方

は農村を背景に若い男女が情死によってその暗鬱な悲劇の世界を閉じる短篇小説である。前者が性格悲劇的要素をかなり含んでいるのに対し、後者は典型的な境遇悲劇と云ってよいが、時に笑いや諷刺も織り込んで特色を表している。けれども、日の光の下で幼い二人の遊びたわむれる場面に限定するならば、相通するもののあることも争われない。

「青い草の上すわっ」て、あお向いて、大きな口をあけ―歯を見てもらう允子。その「開いた口の上」に顔を「かぶ」せて口中をのぞきこみ、珍しそうに「口の中つてずいぶんきれいなものだなあ」と感心する昌二郎。痛む歯をこれと定められず、また抜歯にためらう昌二郎をまだるっこく思う允子。「緑の草の上」に小さく白く光るものを写して、その場面が終わる一齣のある「糸きり歯」の章。

「緑の草が一面にはえ」ている場所に「仰向けになっ」て口を開け、その「開いた口のなか」で白い歯の輝いている女の子。口中の歯を見つけて珍しそうに (neutral) 調べる男の子。歯の数を当てるよう言われる女の子。まだ勘定ができない女の子と代わって数えた後、「草のなかに横になる」男の子。その「上」にのしかかっ」て、「口をあけ」たところをのぞきこみ数を言う、丈夫で活発な女の子。そうした二人が嬉戯する場面のある「村のロメオとユリア」。――両作は、時代・国・言語を異にするけれども、類似のシーンによってやはり関心を引かずにはいない。

もとより仔細に観察すれば、有三人の方には抜歯のことがあり、ケラーの方にはそれが無い。会話の多寡、名前の明記のことも挙げられるが、年齢の問題のことも考えられる。有三人・タキの実際をおさえるとき、昌二郎・允子は十五、六歳（数え歳）ころのこととなり、ケラー作中の七歳・五歳の場合とはかなり開きがある。性的衝動の萌芽を有三人は描いていても、糸きり歯の抜けるころの年齢を明示せず、実年齢に比し子供らしく感じさせる描写をしている観があり、「村のロメオとユリア」の上掲場面の人物設定に似た雰囲気を示したところがある。有三人では笑いをさそうような表現はないが、太陽の降り注ぐ季節であることも見逃し難く、ここではともに作品は童話性を示しているのである。

両作中の景物で目にとまるものもある。「糸きり歯」には、仲よく二匹

のカタツムリが点綴されて二人の間を表象しているようである。ケラーの作には、死に向かいつつあるにせよ、二人が楽しいさすらいをするところ、カタツムリを挙げる場面が書かれている。すなわち実景ではなく比喩表現として会話の中に、この小動物が引かれる。ヴレンヘンが、市場で買った菓子について、たがいに一軒の家を与え合つたことになり、「あたしたちのハートは、今ぢやアあたしたちの住む家ですもの、あたしたちは蝸牛のやうに自分たちの家をからだにつけてゐるんだわ。ほかに家はないんですもの。」と言う場面がそれである。ザーリーは、「さうするとこの蝸牛は、めいめい相手を背負つてゐるつてわけだなア」と答えるのであるが、カタツムリはきびしい状況をも表し、ケラーの浪漫性と現実主義的方面とのぞかせている。しかし、両作ともカタツムリがイメージ的に愛の表現にあずかっている点では共通する。「糸きり歯」の場合柿の実を食べる季節であればカタツムリは点綴できなかったであろう。木登りのシーン中、小川で跳びはねるザユ、上空を飛ぶヨシキリ、擬人法によつてガチョウも書かれ、ピワの甘い匂いに包まれた二人を、有三が「これが幸福というものだ、ということも知らないほど、無心に、黄ばんだ木の実を口に運んでいた。」と記すあたりのこともここで思われる。「村のロメオとユリア」には、早瀬の小川でマスが跳ね、雲雀はザーリー、ヴレンヘンの十三、四年後の一日の次に挙げる一節に描かれている。

そのうちにザーリーは糞糞をおこして乱暴にもヴレンヘンの両手をおさへて、罌粟の花のなかへ押し込めてしまつた。すると娘は横になつたまんま、日の光のなかで目をぱちぱちさせた、頬は真紅に燃え、口は半分あいて、二列になつた白い歯がきらきら光つた。彼女は細い濃い眉を美しく寄せ、わかわかしい胸は、四本の手がからみあつて撫でたり攻めたりしてゐる下で、思ひのままに高くなり低くなりしてゐた。(中略)「まだあの白い歯をみんな持つてゐるね」と彼は笑つた。「覚えてゐるかい、いつだつたか何遍も何遍も勘定したことがあるのを。もう勘定はできる?」「これは同じ歯ぢやないわ、赤ちゃんねえ」とヴレンヘンは言つた、「あれはとづくに抜けちまつたわ。」ザーリーは無邪気にも昔の遊びをもう一度くりかへして、光つた真珠のや

うな歯をかぞへようとした。ところがヴレンヘンは急に赤い口をむすんで起きあがると、罌粟の花冠を編みはじめ、それを頭の上のせた。(中略)かうして金持ちどもが絵にかかせて壁にかけてみるためだけでも金に糸目をつけないだらうと思はれるものを、貧しいザーリーは自分の胸にいだきしめたのであつた。すると彼女は急に立ちあがつて叫んだ、「まあ、ここはなんて暑いんでせう。こんな所に坐つて、お日様にあぶられてゐるなんて、馬鹿ねえ、あたしたち。さア、いらつしやい、高い穂のなかへ坐りませうよ。」二人はほとんど跡も残らないやうにそつと上手にもぐりこむと、金色の穂の間に狭い人屋をこしらへた。そのなかに坐ると、穂が頭よりも高く伸びてゐて、目にいるものは紺青の空ばかり、ほかに何ひとつこの世のものは見えなかつた。(中略)彼らは頭上たかく雲雀のさへつりを聞いて、瞳をこらしてその姿をさがした、そしてちやうど青空に不意に光をはなちだした星があるひは流れ星のやうに、ちらつと一羽、日の光のなかにきらめくのを見たと思ふと、その御褒美にまた接吻をかはし、お互にできるだけ度々、相手をべてんにかけたたり騙したりしようとした。「ほら、あすこにひとつ光つてゐる」とザーリーがささやいた、ヴレンヘンも同じやうに低い声で答へた、「声はよく聞こえるけど、姿はみえないわ。」「見えるよ、いいかい、あすこの、白い雲のある、すこし右のところさ。」ふたりは一生懸命に瞳をこらした、そして巢のなかの鶉の雛のやうに、あらかじめ嘴をあけて、雲雀が見つかつたと思つたら、直ぐさま嘴を重ねあはせる用意をしてゐた。

前掲の一齣のヴァリエーションであり、説話や昔話等によくある繰り返しの語りを思わせ、広義のリズムを示す、メルヘン的な条である。しかし、その世界は宗教的、伝承の古層的契機をも蔵して、解釈上容易ならざる問題を含んでいるらしい。ザーリー(Sati)が、紀元前十世紀のイスラエルの王ソロモンの愛称であること、金色の穂に囲まれた場を「人屋」Kerkerの語で表していること、その愛の精神的な場が神の国イスラエルの再現の楽園であること、星のこと、罌粟が愛と幸福との楽園の花であり同時に死や夢の花でもあること、また罌粟の実が眠り・夢・死の古い符牒

であることを重ね合わせて解釈できる点があるからである。すなわち聖書の世界がその基層に関係していると言つてよく、二人の運命の帰趣を暗示している。その点有三に日本神話に取材した作品があつても、「糸きり歯」を神話との関係で解釈できるとは思われぬ。けれども、作中の人物や表現に接するとき、「村のロメオとユリア」に呈した鷗外の前掲批評を忘れることはできない。この短篇の引用箇所について、

禾雲二児を埋めて、皓齒日に映し、仰臥して告天子の飛翔を観つゝ、相諠する一段は、妙構妬むに足れり。

と述べた評言である。金色の穂麦と紺青の空の浮雲ともに告天子（雲雀）を鳴かせて牧歌的自然を捉える「禾雲」の語句は、若く無邪気な男女を捉えて生動した批評を可能にした観がある。二人の交情を写すケラーの観点について「憨態を以て之を出したり」とする鷗外は、この間の文章の機微に関し、「彼のケレルが村児の恋情と、曾てハウフの駁撃を蒙りしクラウレンの小説にて、野花目を悦ばしむるミミリイが、衣裙風捲きて素脛露呈する談とは、其事殆ど二なし。其差別唯之を写す用心、芸術の本領を守ると否とに存するのみ。」と断じている。「ミミリイ」とはハウフの訴訟事件に巻き込まれたクラウレンの長篇『ミミリイ』（一八一六）にかかわるが、鷗外は、文芸に携わる人の芸術的精神を考え、「村のロメオとユリア」の描述の態度を高く評価したのであった。「妙構妬むに足れり」が、右の二場面を始め作品全体の構成に及んでいることはいうまでもない。

このように観察を進めてくるとき、「禾雲二児を埋めて云々」の批評が有三の心を動かしたことが想像されるが、これを読んでいなかったとしても、「糸きり歯」篇の批評としても適用できるのではないか。作中「禾雲」の語自体はなくても、青空の下、緑の中で白い歯を日にさらし、そしてピワの甘くうれる真昼の静かな田園の中に遊びたわむれる二人を描いて、やはり牧歌的抒情性を醸し出しており、そういう作品の美質を鷗外の言辭は照らし出す評言になり得るように思われるからである。「女の一生」と「村のロメオとユリア」と言えば、そこに重いもののある、あるいはまた美しくも暗く閉じられている世界の中に、掬すべき二人の「憨態」の描写によって明光度のあるシーンを点じて印象が深い。特に允子にあっては、

苦難の道をたどっている際、この幸福な時間は遠くなくても、心中秘かに支えとなる思い出として時に意識されたことであろう。

ところで平野謙は、有三の初期の戯曲に見られる「人道主義的視点」を一步進めた「社会批判的な観点」を前面に押し出した小説の一つとして『女の一生』の意義を認めながらも、プロローグとしての「糸きり歯」を単なるプロットの伏線にすぎないものと批判する。そして、そこに「周到に計算された山本有三の文学全体の弱点」を見る。作者の意図をはみ出したようなカオスを抱えこんだ人間の姿をよりダイナミックに表す文芸の力を求めたからにはほかなるまい。「あすこを悪くいうやつ」の評言を文芸史ははからずも提出したことになるが、作者としては小品「兄弟」（『新小説』大正一一・一〇）や戯曲「海彦山彦」（『女性』大正一二・八）あたりにつながるような世界を考えていたのではなからうか。

しかし一方、荒正人は「糸きり歯」について、「昌二郎と允子の幼馴染ふりを美しく描いた一篇の童話」と評し、「大叙事詩の天上の頌歌に似ている」作と述べ、有三の「雪」「女性」大正一四・三）に注目する。すなわちこのシナリオの「天上の宮殿」中子供たちが、「めぐれめぐれ／水車」云々と歌うのが、ゲーテの『ファウスト』の「霊」の歌を連想させるというのである。人間の世界を「上からつ把まえよう」とする観点を考えることで、『女の一生』と序章との関係把握のヒントにしようとしているらしい。そうすると、「糸きり歯」の場合、都会から遠い、自然に抱かれた環境での異性間の始発的時間の中に子供たちを主人公にしてメルヘン性・童話性を呈示していることが挙げられるのではないか。ケラーの上掲作の場面も、この間の事情を示唆するところがあるように思われる。洋の東西時を少し隔てながらも呼応することく、上述の少年男女を描いて文芸性を現す二作を、鷗外の批評は、豊かに鑑賞しうる視点を提供するのである。

注

(1) 『定本 山本有三全集 第七巻』（新潮社、昭和五二・八）の「編集後記」参照。

- (2) 執筆中官憲の圧力のために妨げられ、不本意な形で出版を余儀なくされ、巻末には(完)とあるものの、中斷をそのまま完結とした感は拭えない。第二部の「第二の出生」中百二十八字の削除のある旨を記したページも見える。ハインリヒ・ハイネの持つ当時のいわゆる危険思想的な面と『女の一生』とが関係していたことも、右の事情にかかわりがあったであろう。六四六ページのハイネの詩の一部が伏字になっており、「警視庁」が伏字になっているところもある(四六四頁)。なお単行本の函の意匠は、新聞の挿画と本の装幀とを担当した中村研一の手によるもので、紫の地にあやめと雨とをあしらっている。
- (3) 『定本 山本有三全集 第七巻』の本文は、新仮名遣いで漢字を極めて少なくし、表記をやさしくして、読点を多少多めにしているが、目につくほどの語句の変更はないようである。第一部「第一の出生」、第二部「第二の出生」とあるのも、この定本版では省き、〈第一部〉〈第二部〉と記すだけである。
- (4) 有三の「糸きり歯」とは無関係であるが、『朝日新聞』一九七五年(昭和五〇)三月二十日の「朝日歌壇」五島美代子選にかかる一首。
- (5) 永野賢著『山本有三正伝 上巻』(明治書院、昭和六二・一二)一五八頁参照。
- (6) 本稿では「糸きり歯」鑑賞のことを重視してこの訳文(角川文庫『村のロミオとジュリエット』昭和二八・八)によったが、鷗外文とのつながりのこともあるので、行論上タイトルは「村のロメオとユリア」とした。なお文芸史の事実を重視するならば、草間か牧山あるいは高坂の訳文を引いた方がよいであろうが、論者としては扱った原文の姿をも考え、上のようにした。
- (7) 清田文武「山本有三におけるシュニッツレルの受容」(『秋田高専研究紀要』六、昭和四六・一)、早川正信著『山本有三の世界 比較文学的研究』(和泉書院、平成二・一〇)六五頁参照。
- (8) 「文壇あれこれ座談会」(『文芸春秋』昭和一〇・六)参照。
- (9) 諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館)の関係漢字参照。
- (10) 注(9)及び羅竹風主編『漢語大詞典』(漢語大詞典出版社、一九九一)、大東文化大学中国語大辞典編纂室『中国語大辞典』(角川書店、平成六)の「憨態」参照。
- (11) Gerhard Kaiser, GOTTFRIED KELLER, Das gedichtete Leben, Insel Verlag, Frankfurt am Main, 1981. S.298-303.
- (12) 平野謙著『昭和文学史』(筑摩書房、昭和三八・一一)一五九頁参照。
- (13) 荒正人「作家と作品 山本有三」(『山本有三集 蒙華日本文学全集27』集英社、昭和四七・一〇)参照。
- 付記 鷗外の『かげくさ』の印行年月について初版は手許のものによったが、訂正再版以後は出版されなかったことを嘉部嘉隆氏より教示されたことを記して謝意を表します。もとより責任が稿者にあること断るまでもありません。